

令和5年度病害虫発生予報第11号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

《予報の概要》

作物名	病害虫名	予想発生量
モモ	縮葉病	並
	せん孔細菌病	並
カキ	炭疽病	並
	<b>フジコナカイガラムシ</b>	<b>やや多</b>
ブロッコリー	黒腐病	並
	<b>花蕾腐敗病</b>	<b>やや多</b>
	べと病	やや少
	菌核病	並
レタス	灰色かび病	やや少
	菌核病	やや少
	べと病	<b>やや多</b>
	<b>疫病</b>	<b>やや多</b>
	腐敗病	やや少
	斑点細菌病	並
	<b>モザイク病</b>	<b>やや多</b>
タマネギ	べと病	<b>やや多</b>
	さび病	並
	白色疫病	やや少
	腐敗病	やや少
	<b>ネギアザミウマ</b>	<b>やや多</b>
ニンニク	春腐病	やや少
	さび病	並
	<b>ネギアザミウマ</b>	<b>やや多</b>
イチゴ(施設本圃)	<b>うどんこ病</b>	<b>やや多</b>
	灰色かび病	並
	<b>アブラムシ類</b>	<b>やや多</b>
	<b>コナジラミ類</b>	<b>やや多</b>
	<b>ハダニ類</b>	<b>やや多</b>
	<b>アザミウマ類</b>	<b>やや多</b>

**太文字の病害虫**：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病害虫を示す。

\* 予報根拠中の記号

- (+) : 発生量を多くする要因
- (-) : 発生量を少なくする要因
- (±) : 発生量が平年並になる要因

# 令和5年度 病害虫発生予報 第11号(3月)

## A. 果樹の病害虫

### ーモ モー

#### 1. 縮葉病

予 想 発生地域: 県内全域

発生量 : 並

根 拠 (1) 前年の発生量は平年並であった。(±)  
(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発芽後の薬剤散布は効果が劣るので、発芽前に実施する。  
(2) 薬剤散布に際しては、散布むらのないよう十分な量の薬液を樹の先端までかかるように丁寧に散布する。

#### 2. せん孔細菌病

予 想 発生地域: 県内全域

発生量 : 並

根 拠 (1) 前年秋期の発生量は平年並であった。(±)  
(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発芽直前のストレプトマイシン水和剤またはカスガマイシン・銅水和剤の散布を徹底する。  
(2) 発病枝は伝染源となるので、見つけ次第除去する。

### ーカ キー

#### 1. 炭疽病

予 想 発生地域: 県内全域

発生量 : 並

根 拠 前年秋期の発生量は平年並であった。(±)

対 策 (1) 前年発生の多かった園地では、伝染源となる発病枝を除去し、適切に処分する。  
(2) 防除は発芽前に実施する。

#### 2. フジコナカイガラムシ

予 想 発生地域: 県内全域

発生量 : **やや多**

根 拠 前年秋期の発生量はやや多かった。(＋)

対 策 (1) 発芽までに粗皮削りを行う。  
(2) ジノテフラン水溶剤を主幹部(主幹から主枝の粗皮を環状に剥いだ部分: 幅30~50cm)に塗布する。  
(3) 前年発生の多かった園及びその周辺の園では、発芽前に薬剤防除を実施する。薬剤散布に際しては、散布むらのないよう十分な量の薬液を樹の先端までかかるように丁寧に散布する。

## B. 野菜の病害虫

### ーブロッコリーー

#### 1. 黒腐病

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並
- 根 拠 (1) 2月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)  
(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。  
(2) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜防除する。害虫の食害痕等からも病原菌が侵入するので害虫防除を徹底する。  
(3) すでに発生している圃場ではオキシリニック酸やカスガマイシンを含む薬剤を散布する。  
(4) 大雨や強風の後には感染が助長されるので、早めに薬剤防除を行う。

#### 2. 花蕾腐敗病

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： やや多
- 根 拠 (1) 2月下旬の発生は平年と同様に認めなかったが、一部の地域でやや多かった。(＋)  
(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。  
(2) 薬剤防除は予防的に実施する。  
(3) 銅剤を使用する場合には薬害軽減のために炭酸カルシウム剤を加用する。  
(4) 降霜などによって発病が助長されるので、低温が予想される場合には防霜対策を施す。

#### 3. ベと病

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 2月下旬の発生は認めなかった。(－)  
(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。  
(2) 降雨後や曇雨天で多湿状態が続くときは薬剤防除を行う。  
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。  
(4) 発病株は放置せずに抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

#### 4. 菌核病

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並
- 根 拠 (1) 2月下旬の発生量は平年並であった。(±)  
(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。  
(2) 圃場の排水を良くする。  
(3) 発生の多い圃場では連作しない。  
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ー レタス ー

1. 灰色かび病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： やや少

根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでの発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。  
(2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。  
(3) 薬剤散布は株元を中心に、丁寧に行う。  
(4) 苗床からの持ち込みも多いので、苗床での薬剤防除を実施する。  
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 菌核病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： やや少

根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでの発生は認めなかった。(－)  
(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。  
(2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。  
(3) 発生の多い圃場では連作しない。  
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでの発生は平年と同様に認めなかった。(±)  
(2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)  
(3) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発生前から薬剤を予防的に散布する。この場合、薬剤が葉裏に十分付着するよう散布する。  
(2) 結球期に発生すると、結球葉まで病気が進展しやすいので、発生を認めたら直ちに防除する。  
(3) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。  
(4) 被害残渣は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

4. 疫病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでの発生は認めなかったが、一部の地域でやや多かった。(＋)  
(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 現在、本病に対する登録薬剤はない。  
(2) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

- (3) 圃場の排水を良くする。
- (4) 夏期に太陽熱消毒または土壌還元消毒をする。
- (5) 汚染土壌を未発生圃場へ持ち込まないよう農機具等は洗浄する。

## 5. 腐敗病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでの発生は認めなかった。(－)

(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 凍霜害にあった場合は速やかに薬剤防除を行う。

(2) 腐敗病に対する感受性は結球期以降に高くなることから、結球初期を中心に予防的防除を行う。

(3) トンネル内に不織布をべたがけにして保温性を高め、凍霜害を軽減する。

(4) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。

(5) 収穫は適期に行い、発病の増加のおそれがある場合は早めに収穫を行う。

## 6. 斑点細菌病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでの発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 育苗は風当りの弱いところで行い、できるだけ傷をつけないように管理するとともに、軟弱徒長にならないよう注意する。

(2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。

(3) ベたがけ被覆しているところでは、降雨が続くと多発するおそれがあるので注意する。

(4) 強風を伴う降雨が続いた後には薬剤防除を実施する。また、結球期から収穫期にかけて発病が増加するので、下葉に発生が見られたら早めに防除する。

## 7. モザイク病（えそ輪紋症状を含む）

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや多

根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでの発生量は多かった。(＋)

(2) 2月下旬のアブラムシ類の発生量はやや多かった。(＋)

対 策 (1) 発病株は早期に抜き取り適正に処分する。

(2) アブラムシ類の防除を行う。また、定植時には、アブラムシ類を対象に灌注処理や粒剤施用をする。

## －タマネギ－

### 1. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや多

根 拠 (1) 2月下旬の発生量は早生タマネギでは多く(＋)、中晩生タマネギでは平年並であった(±)。

(2) 3月の気象は気温が平年並か高く(＋)、降水量が平年並の予報である(±)。

- 対 策 (1) 発病株は抜き取り適正に処分する。特に、越年罹病株に注意する。  
(2) 圃場を見回り、発生を確認した場合は直ちに薬剤散布する。  
(3) タマネギと同一の病原菌によってネギにも発病するので、今後の発病に注意する。  
(4) 排水不良は発病を助長するので、圃場の排水を良くする。  
(5) 薬剤散布を行う場合には耐性菌の発生を回避するため、同一系統薬剤の連用は避ける。

## 2. さび病

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並
- 根 拠 (1) 2月下旬の発生は早生タマネギ、中晩生タマネギともに平年と同様に認めなかった。(±)  
(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発生圃場では薬剤を散布する。  
(2) 同一の病原菌によって発生するネギ、ニラのさび病にも注意する。

## 3. 白色疫病

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 2月下旬の発生は早生タマネギ、中晩生タマネギともに認めなかった。  
(-)  
(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場を見回り、発生を確認した場合は直ちに薬剤散布する。  
(2) 排水不良は発病を助長するので、圃場の排水を良くする。  
(3) 本病が発生すると腐敗病などの細菌病が二次感染することがあるので、今後の腐敗病の発生に注意する。  
(4) 薬剤散布を行う場合には耐性菌の発生を回避するため、同一系統薬剤の連用は避ける。

## 4. 腐敗病

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 2月下旬の発生は早生タマネギ、中晩生タマネギともに認めなかった。  
(-)  
(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発生圃場では、7～10日間隔で薬剤防除を行う。湿潤な天候が続き、急増が予想される場合には、抗生物質剤を主体に5～7日間隔で防除を行う。散布回数が多くなることから、各薬剤の使用回数及び収穫前日数を遵守する。  
(2) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなど害虫防除を行う。  
(3) 伝染源となる腐敗株を早期に抜取り、適正に処分する。  
(4) 排水不良は発病を助長するので、明渠などによって排水対策を徹底する。  
(5) 窒素質肥料の過不足を避ける。  
(6) 同一の病原菌によって発生するニンニクの春腐病にも注意する。

## 5. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや多

根 拠 (1) 2月下旬の発生量は早生タマネギ、中晩生タマネギともに平年並であった。(±)

(2) 3月の気象は気温が平年並か高く(+)、降水量が平年並の予報である(±)。

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する場合がありますので、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。

(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## ニンニク

### 1. 春腐病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 2月下旬の発生は認めなかった。(－)

(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発生圃場では、7～10日間隔で薬剤防除を行う。湿潤な天候が続き、急増が予想される場合には、抗生物質剤を主体に5～7日間隔で防除を行う。散布回数が多くなることから、各薬剤の使用回数及び収穫前日数を遵守する。

(2) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなど害虫防除を行う。

(3) 伝染源となる腐敗株を早期に抜取り、適正に処分する。

(4) 排水不良は発病を助長するので、明渠などによって排水対策を徹底する。

(5) 窒素質肥料の過不足を避ける。

(6) 同一の病原菌によって発生するタマネギ、ネギの腐敗病にも注意する。

### 2. さび病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 2月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 3月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発生圃場では薬剤を散布する。

(2) 同一の病原菌によって発生するネギ、ニラのさび病にも注意する。

### 3. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや多

根 拠 (1) 2月下旬の発生量はやや多かった。(＋)

(2) 3月の気象は気温が平年並か高く(+)、降水量が平年並の予報である(±)。

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する場合がありますので、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。

(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

### 1. うどんこ病

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 2月下旬の発生量はやや多かった。(＋)  
(2) 3月の気象は気温が平年並か高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 薬剤散布は予防的に5～7日間隔で行う。  
(2) 茎葉が繁茂していると薬剤が十分に到達しにくい場合があるので、丁寧に散布する。  
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

### 2. 灰色かび病

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並
- 根 拠 (1) 2月下旬の発生量は平年並であった。(±)  
(2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)  
(3) 3月の気象は気温が平年並か高く(＋)、降水量が平年並の予報である(±)。
- 対 策 (1) 薬剤散布は発生初期から5～7日間隔で行う。  
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

### 3. アブラムシ類

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 2月下旬の発生量はやや多かった。(＋)  
(2) 3月の気象は気温が平年並か高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。  
(2) 茎葉が繁茂していると薬剤が十分に到達しにくい場合があるので、丁寧に散布する。  
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

### 4. コナジラミ類

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 2月下旬の発生量は平年並であった。(±)  
(2) 3月の気象は気温が平年並か高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。  
(2) 圃場内に黄色粘着シートを設置し発生状況を把握し、発生初期から薬剤防除を行う。  
(3) 多発すると防除が困難になるので、気門封鎖剤などの蜜蜂への影響が小さい薬剤を用いて低密度時から防除する。  
(4) 一部の薬剤に対して抵抗性の発達が認められるので、作用性の異なる薬剤で防除する。

### 5. ハダニ類

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 2月下旬の発生量はやや多かった。(＋)  
(2) 3月の気象は気温が平年並か高い予報である。(＋)



- 対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。
- (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (3) 発生が局所的な場合には、気門封鎖剤のスポット散布を行う。
- (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## 6. アザミウマ類

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： やや多

- 根 拠 (1) 2月下旬の発生量はやや多かった。(+)  
(2) 3月の気象は気温が平年並か高い予報である。(+)

- 対 策 (1) 施設内及び圃場周辺の除草に努める。  
(2) 青色粘着トラップを設置して、発生及び侵入状況を早期に確認する。  
(3) 花における発生状況をよく観察し、寄生成虫数が100花当たりで10頭になった時または成虫の寄生花率が10%になった時に防除を実施する。  
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

・住宅地等に接した地域及び広範囲に防除する場合は、散布する前に付近住民などに周知するとともに、飛散しにくい農薬を使用するようにしましょう。

・農薬散布は、無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選び、風向き、ノズルの向き等に注意して飛散防止を心がけましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboujo/index.html>

